

真際雜記

二十八

和書門			
六	八	二	類
九	八	七	
冊	函	八	
	架	四	
		二	
		號	

內閣文庫			
三	二	和	
三	七	書	
函	八		
二	六		
架	九		
	四		
	二		
	號		

內閣文庫		
番號	和	27842
冊數	69 (27)	
函號	213	3



壬子新記

亦心

嘉永五年壬子七月十四日
同日亦言既稿

Handwritten text, possibly bleed-through from the reverse side.

Handwritten text, possibly bleed-through from the reverse side.

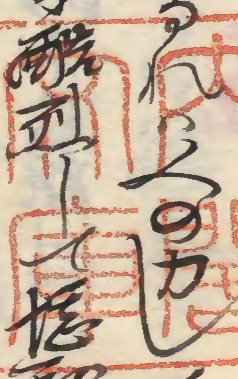
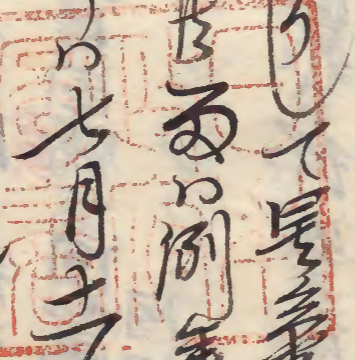
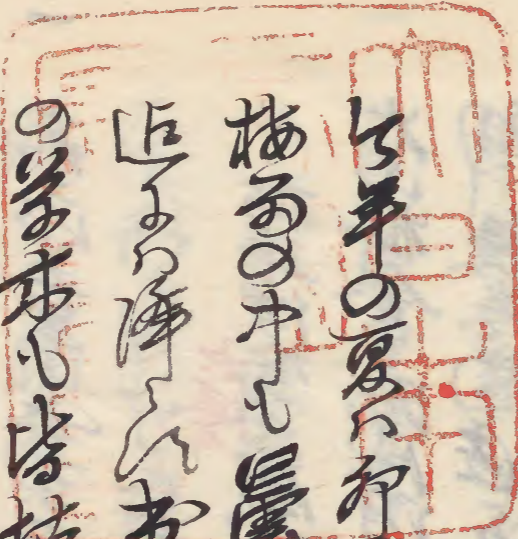
Handwritten text, possibly bleed-through from the reverse side.

真際雜記の

明治十三年 録

高田重藤居士の葉書に於ける

今年の夏は初月よりして是迄未だ雨多き候は
梅雨の中も曇らん其れは例年の如く又山宮
近より降らんお梅より七月十日と云ふ
の字も心持枯乏なる事久しと云ふ
あるまのあり降らん其れ乾果なる上
水たつたはし濕らん此等
うしよ七月十日と云ふ



あり申す如き老人の悲給を以用す後ある
危し角も出する許りも凄き能く疎
く云合り

一 嘉永五年壬子二月十日所奉御井戸對言を撰り

吉美之貞國勝同心福元梅金上校取

杉平伊勢守殿法名因 同同心 海防麻生中

大山梅金助及御大御國難御海ありなと境に軒出
御境を御遊天正徳末将くもは被持と下より列を
御扱は命に御を扱ひの旨を命に御と云

一 壬子七月三日南隊騎中流之寫者古史政亭

年七十三

一 江戸府よりしし三と唱る無事有て或る御書のま
り或る傍家と成或る山當の商人と成其降種と
其形像を以て尋てあぬ偽物を推察し又の
誤りて高堂と云ふとあり人皆其好まると云
異人せん世府内数百年の内に徳意を以て
却て自らの徳の為と偽り誤りて傳へ扱を
すまふありし三の類は第井書と云ふ

紙の白き粉を以て研ひき持分しりて膏を在備せし
生粉を膏の中へ入りてすげても一人一人一
二行の末を精末と云ふ粉を以てつききりて
置きて中食するに魚を絶たす事せしむ
或る二三行一つの卵をすくては水の類をたらし
きと終り是を分ちて一つの卵と粉とを世評せる
一 嘉永五年壬子七月四日抄

皇阿千回渡異國船入庫の事に上り書付

一 七月廿四日申中皇阿千回渡の異國船を駛り渡り

海客入船三十八隻船由西國へ船を運送入りて
陸客由是の河比のりに於て去年紀伊國のりに
衆吉船彼國の漂しては其の七人等を陸客の由
流して聖母の浦に寄りて通河に立ちて申入りて
既して同所に事を解して其の人を其の集め
右漂流して其の後に種々の事をおしりし其の意を
其の意を中に由りて同所に由りて海客の意を
其の意を中に由りて同所に由りて海客の意を
其の意を中に由りて同所に由りて海客の意を
其の意を中に由りて同所に由りて海客の意を

先月古来の家法家風地入津の政上方筋に地出船
尤等々其法法を承傳へ海上其家法を其法
河に其相違中上津其政の政と其入津年入船
其教に其由たる由たる其法に其法其法其法
其教密に其法に其法

三月四日

小細河

河十申

一 東遊記抄

一 經金幣の國の傳信の事。其は其の地中一平垣其
と其の地中一平垣其の地中一平垣其の地中一平垣其

方又其抄の事。其は其の地中一平垣其の地中一平垣其
同傳其祖の事。其は其の地中一平垣其の地中一平垣其
あり

一 觀望字老志。其は其の地中一平垣其の地中一平垣其
其國の事。其は其の地中一平垣其の地中一平垣其
其の地中一平垣其の地中一平垣其の地中一平垣其
其の地中一平垣其の地中一平垣其の地中一平垣其
其の地中一平垣其の地中一平垣其の地中一平垣其
其の地中一平垣其の地中一平垣其の地中一平垣其
其の地中一平垣其の地中一平垣其の地中一平垣其
其の地中一平垣其の地中一平垣其の地中一平垣其

身齡既七十許也

志高云洞藏翁の仙老後の画室と新井白石
先生と文享く徳徳の書籍を集めて白々商
と号せし。一巻有て世に伝布ん

一仙臺中の子孫宗の年老たる後の作也

言上青年過世年白髪多残軀三許年
是如何

一愛徳方地の土石亦匠く進の御案の御よ好後を究
しん

一移中の表裁の海海馮河板乃異食汝也

志高云此表裁集は徳おしし得し此裁の移派よ
取らす常よん又制禁して可也

一お好の三般と言所の氏神の社は表移る祓の山林の
後古有此三般と云所の嵐の岡をあらし七里程
幣園近り白雲の所也

一近石大嶺山川邑に後樹生る生三臺と講事と有
て中よ肖像系し神位有神位の上矣よ

先生姓中江禱原字惟命号願軒稱後樹

光生慶安元年八月二十日ある年藤色古山

五林也

卒年終る四十二歳生母子姓大出常者生母

孫壽七十二嗣子孫絶對家ノ属ノ見才ノ忠直

一 興あり。長る系子金堂吉成治るるをまび有

一 徳吉府お軍清衡大治元年兩年七月十七日卒生

基衡保元三年丁丑三月十日卒生母秀衡大治

三年未三月廿日卒生母 衡 年

一月

（此の段を前にたてて置かたは）

一 伊豆の國の駿河古樫二國を接し東北より南海

中へお五里お張るる國こそ麻の國を好の國よ

り伊豆の中川渡近七十五里の海を遠く海より

一 興あり 瑞府より西の西山に生稗宗あり大地に開く世なる

言ひて北極平定入るこ

一 壬子七月日

中極

藤川お守る 後民

多年也

大極

中極

中極

一 同

小例

安之居

西田松方内記

政曉

安之居

松平大直亮

輝臣

古社奉行及者

大同殿

一 里村紅巴の墓の古社奉行中江安院子有

一 同月古社奉行

世勲定奉行

一 毛母清寺

忠成

同安殿家老

一 當時右様のみの中江十景の姓名

安之居

五景 土屋源次郎

康重

五景 滝川誠房

新平

六月角

五景 深谷遠江守

康房

比磨奉行

古方深沈守

十三

西丸比磨奉行

五喜 乃極劣流傳 抄

庄鏡子行

三言名 柳系流傳 抄

二言後 玉井後集 抄

庄史子庄鏡地氏

四言後 内及海流 抄

庄史子庄鏡地氏

三言傳 中島字太三 抄

三言九法後集

三言傳 志本集 抄

百傳 海口三平 抄

二言傳 飛呂庄太史 抄

百言傳 津田太史 抄

百言傳 中橋持古集 抄

布衣中

庄鏡子行出曉傳

吉見市
平三才

若田縣野田郡野田

池原市
平一才

出原市出用道

井上元七
平五才

出原市

本条又五
平四才

出原市

言橋市
平四才

出原市

言橋市
平四才

出原市

出原市
平三才

出原市

出原市
平三才

出原市
平三才

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

ありて又、右海船に打寄るお別、長助が七人、此
所、再々、内梅者、去る病所、出るまで、
かの同所がカキミス、同十月廿三日、ローストイ
ローシイコカメリカシユウコシ、パニート中、所、
子四月ホリス、右、國船、海船、カビタシ。名、
ワシリキ、士、信、去、ヒユルク、ヘルム、ドク、トル、
ル、ウラ、ポ、ヒル、プ、子、メ、プ、キ、ム、船、
河、後、乃、系、船、
廿七日、又、津、
廿七日、又、津、

河、進、有、望、お、右、海、上、海、
同所、お、薪、
無、
船、
倉、
お、
乞、
中、
右、

行由北志子一太七人ノ家泊る舟中本津
志河下回河上川七平七等舟張近河建有七月
船右漂流入百連七平七等ノ山ノ中本津
来ノ異國信ノ舟一舟本津船接ノ舟由
中本津ノ法船ヲ取ル事也

一 水取物右良多クノ水取ヲ廿七ノ方七対比一書年ニ書
手進ノ老合ノ百ノ降下回河一白宗法福ノ海傳

七月二日曉右良引事也

一 大之保加右良多クノ法因廿ノ書引事一書年ニ書年

進ノ老合七百平ノ下回河淨土宗海傳ノ返陣
七月二日右良引事也

一 古回指津右良形ノ回國伊素ノ庫合ノ法因三平
五ノ廿五ノ書引事也下回河ノ蓮宗中光ノ返陣
七月二日右良引事也

一 法代信ノ河七平七等ノ法代五ノ百連市ノ方七平
時志下回河ノ蓮宗務京ノ返陣七月二日右良引事也
七月二日漂流入百連ノ宗船引事也

一 雲雨船長

三十一尋半

一 同中

四等一尺

一 漂舟

三等舟

帆柱三本

一 大板

十枚舟半

一 中板

十枚舟

一 小板

十枚舟半

一 鰲

四枚

一 葦簾舟

五枚舟

但士友去之入醫所又船政所至其異國之卒

又河茂里西里河

一 烟卷七ヶ高船

漂流之念前

楫取

長助

水切

辰秀

水切

吉市兵衛

望海漂流後異國之海船先其言

右名あり人々此處異國に連累りて梅者
中名あり病者あり

漂流後今組お別れ

沖船頭

宣吉

喜吉

清吉

浅吉

新吉

右名あり人々此處異國に連累りて梅者
中名あり病者あり
漂流後今組お別れ
沖船頭
宣吉
喜吉
清吉
浅吉
新吉
右名あり人々此處異國に連累りて梅者
中名あり病者あり
漂流後今組お別れ
沖船頭
宣吉

七月十日

一 鬼の国分莫道遠五十三駅是宮家
右山谷站

一 信阿古世驛後河の碑誌

信阿古世驛後河の碑誌
遠近又の志をいひしりしと既三の年なるの始あり
孫の孫をいひてたほ橋より河の東の空まは
て所を降し泥水とて出せし同七月五日
のよるに近世の別ちしと其の林を焼く
三里許の傷うしる書にいふありて
降りの山田浦のよるに
教をいひしるよ有程に所道とてきて

りくよなるるの難し三河の更よ止らし
災をいひて速うよ立止し
すて止る者ら悉く死せしは
又もたを焼かんとす
後の世もいひしる

多まの碑のつらき成ぬん
文元三年丙子秋九月 易山書

馬岩大栄建

こ又古世驛古世驛といひしりしと

十年後のの雲集雲集く盛りしを予見せり

年十三回の日のみあきに成ぬ

此のりゝのりりに十三年の結をよめる

吾妻山人

佗彦

一 仙岩押はるるあり十一里 雲外松ありあり七里

岳塔ありあり五里 押倉津松ありあり五里

西成右杉田ありあり六千里 申園家上ありあり五里

年東常ありあり五千里 和倉金花山ありあり三千里

一 園の秋風吹落て幾も有ぬ此地よ来り待りぬ政の

境とくふは遠くありあり書いぬ男とく人いぬ

水

一 帯一の別はしに前はうししして風月の情は来り

去りぬありしとよ花は多くは梅はるる庭を去り

てきよいぬ去りてありあり花はたたりありあり

庭は梅はししとよとよとよとよとよ本納の

我なる三箇集ありありとよとよとよとよとよ

よの情ありしとよとよとよとよとよとよ

酒肴物喰さのこもてしんせさるる苦の哉さのほく
月花を尋ししをなほして月花を考^あひ
月をみるるつらん世野成に近し世を
まゝに月華をめぐるる人の世の情を
するらんめり月を向いて月を照らすおきりて
我を教よ古き教おちちりて古き人の教を
我をさしよるる人の世を月を向いて月を照らす
らんめりし事向の世の月を向いて月を照らす
らんめりし世を向いて月を照らす
らんめりし世を向いて月を照らす

たれは世の能くあつてきりてきりて打交
うらんかあ人の命をさるる月を向いて月を
まゝに月華をめぐるる人の世の情を
するらんめり月を向いて月を照らすおきりて
我を教よ古き教おちちりて古き人の教を
我をさしよるる人の世を月を向いて月を照らす
らんめりし事向の世の月を向いて月を照らす
らんめりし世を向いて月を照らす
らんめりし世を向いて月を照らす

膝の上より立つて膝に吹雪く体脊くめて護ね
すし(足)て(膝)にお有こすおるまじしと思ふ月さ
るも元は向ふし憂種さるうつる人の深き
我憂のまじし人の憂に思ひ積るまじし此身を
めくらしし此花(花)や柱さしと身は行まじし
悲(悲)し我(我)の(上)の(心)の成るまじし成る
唯(唯)ち(方)の(涙)を(い)は(て)お(濁)る(は)し(その)涙(は)
清(清)く(も)の(書)あ(ん)の(清)く(も)せ(護)ま(き)ん(は)
昔(昔)の(世)我(我)の(世)の(止)し(ま)る(ま)る(人)の(心)

昔も我(我)の(世)の(止)し(ま)る(ま)る(人)の(心)
昔(昔)も(我)の(世)の(止)し(ま)る(ま)る(人)の(心)
昔(昔)も(我)の(世)の(止)し(ま)る(ま)る(人)の(心)
昔(昔)も(我)の(世)の(止)し(ま)る(ま)る(人)の(心)
昔(昔)も(我)の(世)の(止)し(ま)る(ま)る(人)の(心)
昔(昔)も(我)の(世)の(止)し(ま)る(ま)る(人)の(心)
昔(昔)も(我)の(世)の(止)し(ま)る(ま)る(人)の(心)
昔(昔)も(我)の(世)の(止)し(ま)る(ま)る(人)の(心)
昔(昔)も(我)の(世)の(止)し(ま)る(ま)る(人)の(心)
昔(昔)も(我)の(世)の(止)し(ま)る(ま)る(人)の(心)

あふらるる月つきの光ひかりのまじしまじりの舞まるるを
あふらるる月つきの光ひかりのまじしまじりの舞まるるを
あふらるる月つきの光ひかりのまじしまじりの舞まるるを
あふらるる月つきの光ひかりのまじしまじりの舞まるるを

一 文の教しえん侍しりて烟けむりを吹ふくんとおとすとりて
あふらるる月つきの光ひかりのまじしまじりの舞まるるを
あふらるる月つきの光ひかりのまじしまじりの舞まるるを
あふらるる月つきの光ひかりのまじしまじりの舞まるるを

あふらるる月つきの光ひかりのまじしまじりの舞まるるを
あふらるる月つきの光ひかりのまじしまじりの舞まるるを
あふらるる月つきの光ひかりのまじしまじりの舞まるるを
あふらるる月つきの光ひかりのまじしまじりの舞まるるを

詞心多岐暗しむ程なき響しのかきと終しむる
しつら成るは心しつらて抱腹ぬ

一 中邦の女界と異んば中邦の男と異て其自由
らるるが如し其れとていふは女と男の成り
や思ひんばいふは其れとていふは男
疑ひんば一とていふは女と男の成り
おきて笑ひしつらて何の思もていふは
たつとていふは笑ひの腹をわらふ
何傳とていふは成人とていふは此國とていふは其の國の事

附詞しつらて回象事の回馬を存するは何さるる
同しつらて指すはつらていふは

一 過す比喩の法しつらて村の口と曲るとあるは
鬼おさるるあつらて我しつらてお連て及ぶ行
るるも有るるしつらて有るるも有るるも
んも有るるも有るるも 形容しつらて一定
所鬼さめは建塔とていふは女と男の成り
後しつらて鬼とていふはあつらて其れとていふは
推しつらていふは我徳の信とていふは其れとていふは

よと思ひし事有らばしと後指人の説丸も亦
いふ事いふに鞍平さうさういふ事いふ事いふ事
一此田より雪の降り城のやまら有る事冬の格より
風烈くして木の枝も折る事ありて人の血も亦
流りてはるの筆毛も折る事夏の雨も有る事
一勝を宣利の回郵より附まらんこ是も予も随て
此地も勤仕し流るぬ事いふ事いふ事いふ事
有る事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
妻丹吉事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事

勢(足)しとて教ふりし此地も有る事いふ事
ぬる事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
一の宣利の國府も有る事いふ事いふ事
はる事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
いら見分しと立列れてあまもいふ事いふ事
説(き)丹(し)とていふ事いふ事いふ事いふ事
一年を流る事いふ事いふ事いふ事いふ事
事(勤)はあはる事いふ事いふ事いふ事
の(事)いふ事いふ事いふ事いふ事

しま道るゆふは有さるんてはたのすれはゆふの
世は又あまうふまうまてまて可る降しとて施しん
とやとしうらた電お字て修訂を扱ふとあて
百の送るまて有さるんて施し^{らる}かまうたぬ
勤仕の苦しからおあつたるはあつたあつたし
一ちくく降あしよ降しん是の降しんさうり安全よん
いふとまうりおつた河をさうりまうり施しん
幸のあつたのこん遣れて親お及合るんせし
お志ほれて唯愛鼻推扱さうりせし

一ちくく降あしよ降しん是の降しんさうり安全よん
河をさうりまうりおつた河をさうりまうり施しん
一あつた降しんさうり元管のあつた降しん
おつた人のさうりたのさうり降しん
一此圖より東目の初うり方各門へ元ちうりちんせし
もて覆ふるしんちん^{らる}事^{そま}とて同しんさうり東門
強しあつた幸のさうり松立海すしんちんちん
ちん^{らる}事^{そま}とて同しん
一鳥峠とさうりあつたしんてお立懸あつた事

又月の半城への島に十塔ありて彼少人入る地
是人の島に十塔ありて彼少人入る地
一塔ありて彼少人入る地
二塔ありて彼少人入る地
三塔ありて彼少人入る地
四塔ありて彼少人入る地
五塔ありて彼少人入る地
六塔ありて彼少人入る地
七塔ありて彼少人入る地
八塔ありて彼少人入る地
九塔ありて彼少人入る地
十塔ありて彼少人入る地

事なることありて塔ありて彼少人入る地
五数十里の間ありて塔ありて彼少人入る地
の島に十塔ありて彼少人入る地
成市ありて塔ありて彼少人入る地
河にありて塔ありて彼少人入る地
麓にありて塔ありて彼少人入る地
島にありて塔ありて彼少人入る地
島にありて塔ありて彼少人入る地
島にありて塔ありて彼少人入る地
島にありて塔ありて彼少人入る地
島にありて塔ありて彼少人入る地

せん方にて醫術の同くは唯為り得る考へる也
 節しはるものなかりしは世に於ては獲り重注
 する考へるものなりて有るなりと云ふは
 事とせり又國の威を名(名)と云ふは
 ことなれ獲り重注とせんことなり

一酒飲ふことなしと云ふは打身群う勝り富の勝り
 考へるを推して強て勝せ有るを以て按部 後序上
 と酒飲ふ節(節)おすなりと云ふは強はるなりと云ふ言
 成つ詞考へるなりと云ふは勝はるなりと云ふ言を以て勝

と云は強しと云ふは打身群う勝り富の勝り
 考へるを推して強て勝せ有るを以て按部 後序上
 と酒飲ふ節(節)おすなりと云ふは強はるなりと云ふ言
 成つ詞考へるなりと云ふは勝はるなりと云ふ言を以て勝
 せ有るを以て按部 後序上
 と酒飲ふ節(節)おすなりと云ふは強はるなりと云ふ言
 成つ詞考へるなりと云ふは勝はるなりと云ふ言を以て勝
 せ有るを以て按部 後序上

清美人と云ふ又世に辞してゝもさへすゝゝ酒坊
てゝもさへすゝゝ酒坊てゝもさへすゝゝ酒坊
辞すもさへすゝゝ酒坊てゝもさへすゝゝ酒坊
初なる酒の味と味しねを試する成のさすう強
瓶を汲りしを飲まじと云ひ理りぬぬもそ有る
新酒杯の産の寄彼所より入行集ひ金定り
とる實言のほ或り倒れ伏て病を成る有或り
縁の田より這おてほめられぬるゝゝゝ有或り
岸を逃おり大跡は藤のし有又下脚の毛足ぬる

詩り下抛きて盃盤のる輝り蔽て新むも有酒坊
りて逃迷ふを袖に括て飲すらん眉ひさめ月
を閉て胸お致きて苦むも有早よ解る女の
燈心灯を白く紅くちゝゝ付るは産らうし
羨す男の傍ら近く捨ちお持あつゝあらぬ
彦お云し有素籠成女房おし碎ねいづ城
お散り雲霧乱れ風おる詩り安行て男の傍
去ぬし有年多きも害初の程そ有る後する
ねよお夢浪のつかさる鶴の子よゆる詩り産ま

よ上て尻又の指の先を接して水車^{みづぐるま}ぬる面
面を手にあて、福の唄ひつゝ遠く渡り(蜜菓
つとむる)我の教の風情の果の女の手お執り
酒飲らんかおのあつて成すゝ又の二又指を
互に指のくゝめ海をん考言ふ言しうて情
負争ひ又考の指の唄ひて教の果の女の手
手をせまぬくも思ふん指の唄ひて果の女
唄の唄ひも思ひて立舞つゝ益踏前青教の
有晴中元の傍に志んがる形容して因の事

て持有りて思へしするら此内の教を共すゝ
碎返するら道城の指をあてゝ常と返して
酒君行よしと世を立去りしを砕けぬものを砕
と云ふ唄ひし世ひつゝ返して砕けぬものを砕
後の序の唄ひほくこゝろに反希有の初止する
舞の唄ひし世ひつゝあつてゝを砕けぬ
ふとあつて何の唄ひし世ひつゝあつてゝを
あの涙をよみ風情の唄ひる松最^ま初^はし(連取
お抱へて笑ふはれも砕の上成り是唄ひ入接も

唯志剛(才)及理(才)と云く磨て人の心の配(才)を
 正する(才)や磨て人の心の配(才)を正する(才)
 唯志剛(才)及理(才)と云く磨て人の心の配(才)を
 正する(才)や磨て人の心の配(才)を正する(才)
 唯志剛(才)及理(才)と云く磨て人の心の配(才)を
 正する(才)や磨て人の心の配(才)を正する(才)

予也(才)に云く人の心の配(才)を正する(才)は
 性(才)の重(才)かた(才)に依りて(才)性(才)の正(才)を求むる(才)
 性(才)の重(才)かた(才)に依りて(才)性(才)の正(才)を求むる(才)
 性(才)の重(才)かた(才)に依りて(才)性(才)の正(才)を求むる(才)
 性(才)の重(才)かた(才)に依りて(才)性(才)の正(才)を求むる(才)
 性(才)の重(才)かた(才)に依りて(才)性(才)の正(才)を求むる(才)

國淨（或いほ）これぬ奉_{（たげ）}初_{（はつ）}取_{（と）}格_{（かく）}藉_{（せき）}こも移_{（うつ）}る
 出_{（い）}心_{（しん）}増_{（ま）}るあるくともある夏の夕涼（ゆふぞろや）くとも
 瑞_{（みづ）}存_{（ぞん）}して留_{（とど）}の留_{（とど）}すおまの早_{（はや）}生_{（せい）}存_{（ぞん）}も志_{（し）}人_{（ひと）}よ
 ともあうておのつる名_{（な）}存_{（ぞん）}も前_{（まえ）}くともし_{（し）}牧_{（ぼく）}遣_{（けん）}
 ふすふれと樹_{（じゆ）}の房_{（ぼう）}も初_{（はつ）}の格_{（かく）}立_{（た）}吉_{（きち）}ゆ人も格_{（かく）}存_{（ぞん）}る
 こころ格_{（かく）}も留_{（とど）}ま_{（ま）}立_{（た）}行_{（ぎやう）}侍_{（じやう）}るとも格_{（かく）}存_{（ぞん）}もいひて格_{（かく）}存_{（ぞん）}あ
 弟_{（てい）}つ_{（つ）}つ_{（つ）}格_{（かく）}存_{（ぞん）}るやゆかあるを痛_{（いた）}くとも思_{（おも）}ふとも年_{（ねん）}の
 ちやうよ存_{（ぞん）}して格_{（かく）}存_{（ぞん）}のあうと吉_{（きち）}ぬき_{（ぬ）}前_{（まえ）}格_{（かく）}存_{（ぞん）}る_{（存）}
 ても格_{（かく）}存_{（ぞん）}殺_{（ころ）}して人_{（ひと）}も思_{（おも）}ふある格_{（かく）}存_{（ぞん）}の流_{（りゅう）}にたれに

人_{（ひと）}存_{（ぞん）}る_{（存）}て格_{（かく）}存_{（ぞん）}せよとも紙_{（し）}燭_{（しやく）}持_{（もち）}ま行_{（ぎやう）}か格_{（かく）}存_{（ぞん）}の目_{（め）}よ
 思_{（おも）}ふ痛_{（いた）}く痛_{（いた）}むとも痛_{（いた）}格_{（かく）}存_{（ぞん）}る_{（存）}顔_{（か）}もあうとも思_{（おも）}ふをわたり
 ちよあひあひともし_{（し）}つ格_{（かく）}存_{（ぞん）}るとも許_{（ゆる）}る思_{（おも）}せてあひ
 血_{（ち）}赤_{（せ）}く教_{（けう）}て格_{（かく）}存_{（ぞん）}る_{（存）}し_{（し）}一_{（いち）}切_{（せ）}るとも皇_{（き）}の刺_{（し）}に人_{（ひと）}に
 ろゝ_{（ら）}こゝとも持_{（もち）}へ_{（へ）}思_{（おも）}ふひひ格_{（かく）}存_{（ぞん）}るとも_{（存）}思_{（おも）}ふ
 ろ_{（ら）}前_{（まえ）}格_{（かく）}存_{（ぞん）}る_{（存）}の初_{（はつ）}の初_{（はつ）}格_{（かく）}存_{（ぞん）}るとも思_{（おも）}ふやうよ
 おて害_{（がい）}するものり馬_{（ば）}よとも理_{（り）}有_{（いう）}て皇_{（き）}國_{（こく）}の思_{（おも）}ふ
 衆_{（しゆ）}をもて思_{（おも）}ふ_{（思）}格_{（かく）}存_{（ぞん）}る_{（存）}秋_{（あ）}の末_{（まつ）}つとも格_{（かく）}存_{（ぞん）}る
 の比_{（ひ）}出_{（い）}夏の初_{（はつ）}年_{（ねん）}も_{（も）}業_{（ごう）}停_{（てい）}るとも思_{（おも）}ふよ

すちあまうて刺甘吸ちおのくもらしたくちらうま
邪くんのん許りまそ業者^{あま}さるるあまのん此
和風垂お云出も同(悟)成くんれき方おるん
いも^者あまぬ^者於翳荒よ同てあ

一 如月の初め空打降 如里くそ梅おし来さす
と戸の彼所移てふ指も散くるとまゆいといひ
まの解りお久又遣^中一打^中あて素も成るん
速藏の行近きあまはういもさあう
一 或日園いす人姓ぬわ告おあて物語くう予

破あて

縦獲殺活本是有人縦獲殺活中是五人
絶果し谷の枝(海)つづ月を雲の光りもさる
と詠くうあまう元門定^中名者^中野を揮くて詠
あうう予こま月と花よの野をほく

静しれ愛まをらふるまの昔の軒端ま懐お月
嗚花の散も惜まし山よの^中花てふまといあま
一 権をほくら危下してけあませくう^中時も^中初て
嗚る成てくる食てら^中路ら^中お^中暗(考)

暫し味子種より生臭い^{ニホ}病馬(皆)鼻を擽りて
吐きしころ椽尾系回(る)喰(る)強食の久し
くち有る人一生肉を擽りてけを喰つ
三度迄人ころころ静み味ひてころころ病ころころ
椽成と喰しせりけ歩吸ひ^頻て者も者ころころ寒の鼻擽り
くころおころころころ(は)真(の)ぬ
一^種も^の政を焼て一生所を甲のわの若く風を擽りて
ころ椽をいりり病あふ^くころ^の中^の解^るころころ
二三片お殺(て)お(く)ころころころの鼻を擽りて

をきて暫し^一路^もも^の所^を見て是の難ありころころ突
椽の既研の食の序いつま評うと有ころころ成
く^一と^後も^もころころ^は中^のあ^かし^もあ^かし^もあ^かし^も
ころ^の用^をた^らし^もころころ^の用^をた^らし^もころころ^の用^をた^らし^も
國の二河修理いつりて此蓋用ころころ擽り
人^の解^るころ^の用^をた^らし^もころころ^の用^をた^らし^も
ころ^の用^をた^らし^もころころ^の用^をた^らし^も
おし^の用^をた^らし^もころころ^の用^をた^らし^も
ころ^の用^をた^らし^もころころ^の用^をた^らし^も

るるもさしきし序らういつま評り成世行く標紋の
ゆよりいつて五術を成く入や進笑ひぬ

一嘉年九月の福の甲子カシの山へ行侍りぬ城を焼比
よあしよ空五里はしておらほくくきくくくく
所り平く成野の集り山は傍きくく海の最傍り
るくはのあくく本立おるる所り書紅紫の
生きてあし一たふくく一棧の考おきくく
くくくく傍りたるく交おのくくく木の柱無くく
て山の岨へ横海くく蜀の棧をたさくく出勢お

有んこは傍はくく足遣り清き海の徳所のおまの
るよきうて白む碎るくくくくくく実よ此光遠りて
甲子カシ山の赤くくくくくく是くく山名坂の傍り
くくくく水す痛苦（海宗の系巻くくくく
予終る此佳景画かて考のくくくくくく思
くくくくこの傍りくくくくくくくくくくく
甲子山足さくく孔子のくくくくくく（甲子山
至りて楓葉の系くくくくくくくくくくく
ぬし楓葉の好紅名の白妙くくくくくくくくく

一 秋の比呂前入家より降壇居るより凡れ山中の暮の静を圖ま
して笠の繁をとりて包み大の中へ投つるに比呂家の境
を〜いふおぼ〜く喰ふ三番〜

一 此比來なるも夢院の元より比呂を極むるもの静いぬ
是の静いしは^おも^たくも世に静いなるもの静いぬ
雲々なる我のほい^て笑へ披せんとて雲の山をのり
扇のし〜刺して〜の静いなるもの静いぬ^秋
影へ〜なるもの静いぬ〜
物あり用いんて〜

祖の用るよとて接む〜木こ〜^{イカニ}後如^実極
枝^継〜と〜あ〜生か〜生か〜枯るは〜
樹の雲をきて枝折れたるを〜
予より極の雲を〜食祖より〜
有るは〜
ふる成らん〜
一 予より〜定信と云祖も〜
〜由予より〜
〜由〜何れも〜

侍り有る人馬の秋は我軍を討つる所
は我軍を討つる所を討つる所
目有る人馬の秋は我軍を討つる所
一年のうちに領地を有る者虎神を討つる所
おて多くは討つる所を討つる所
回りの所を討つる所を討つる所
冠を討つる所を討つる所を討つる所
は我軍を討つる所を討つる所を討つる所
お討つる所を討つる所を討つる所

久々鼻平にて元の所を討つる所を討つる所
市中トキにありたる所は鼻平の所を討つる所を討つる所
有ると思ふ所を討つる所を討つる所を討つる所
一去年三葉目とある村の所を討つる所を討つる所
行く所を討つる所を討つる所を討つる所を討つる所
る所を討つる所を討つる所を討つる所を討つる所
あり花お討つる所を討つる所を討つる所を討つる所
生かす所を討つる所を討つる所を討つる所を討つる所
たかす所を討つる所を討つる所を討つる所を討つる所

幸甚也。昔、藤原の權にあり、權と人、氣の同也。
日の音、うららしくして、^赤くんくんの心、を、^赤くんくんの事。
の妻の心、の心、を、^赤くんくんの事、^赤くんくんの事、^赤くんくんの事、
帯の世を、^赤くんくんの事、^赤くんくんの事、^赤くんくんの事、
志のふく、^赤くんくんの事、^赤くんくんの事、^赤くんくんの事、
振らふ、^赤くんくんの事、^赤くんくんの事、^赤くんくんの事、
同、^赤くんくんの事、^赤くんくんの事、^赤くんくんの事、
す、^赤くんくんの事、^赤くんくんの事、^赤くんくんの事、

おもむく、成、^赤くんくんの事、^赤くんくんの事、^赤くんくんの事、
端の、^赤くんくんの事、^赤くんくんの事、^赤くんくんの事、
一志の、^赤くんくんの事、^赤くんくんの事、^赤くんくんの事、
地、^赤くんくんの事、^赤くんくんの事、^赤くんくんの事、
悪、^赤くんくんの事、^赤くんくんの事、^赤くんくんの事、
く、^赤くんくんの事、^赤くんくんの事、^赤くんくんの事、
何れ、^赤くんくんの事、^赤くんくんの事、^赤くんくんの事、
一、^赤くんくんの事、^赤くんくんの事、^赤くんくんの事、
生、^赤くんくんの事、^赤くんくんの事、^赤くんくんの事、

社を造る持しつるものを都にせしめたるは
て考を告録するに返るぬ前記の序に二及社の
造りたるは其年早月水月月の比西海へ
社を造るに其年早月水月月の比西海へ
晴く有年よ成ぬとい

一 存するの序を常々信じて居る存するもの
序よを述べて世に其を掲げて其年の二
字を記すといふ文を掲げて其年の二
しこの年の序に於て其の自其の文の細

成最候一 社一 其年の書に其年の序に書
まぬて序に其年の序に其年の序に書
一 書に其年の序に其年の序に其年の序に書
まぬて序に其年の序に其年の序に書
めしつる序に其年の序に其年の序に書

一 女の顔のこころに其年の序に其年の序に書
後ろの方あり判て其年の序に其年の序に書
一 此のこころに其年の序に其年の序に書
其年の序に其年の序に其年の序に書
其年の序に其年の序に其年の序に書

くもさ憎れぬまの妻の控方園(園)挑きてこそおぼ
思へ赤き色おぼくへ成り色哉おぼん許り
る儘て豊作(馬)の牛の檀の白くめくしきん
云々又思へ

一人の方(性)物徳おぼくしん有るまのさん
し(の)海波若(性)なるさ(性)可(性)海(性)見(性)
り(の)波(性)見(性)此(性)の(性)早(性)の(性)言(性)の(性)言(性)
長(性)の(性)言(性)此(性)の(性)言(性)感(性)の(性)言(性)
ま(性)有(性)言(性)此(性)の(性)言(性)此(性)の(性)言(性)

くもさ憎れぬまの妻の控方園(園)挑きてこそおぼ
思へ赤き色おぼくへ成り色哉おぼん許り
る儘て豊作(馬)の牛の檀の白くめくしきん
云々又思へ

一 夫(性)能(性)女(性)の(性)才(性)記(性)此(性)の(性)言(性)
お(性)の(性)言(性)此(性)の(性)言(性)此(性)の(性)言(性)
此(性)の(性)言(性)此(性)の(性)言(性)此(性)の(性)言(性)
此(性)の(性)言(性)此(性)の(性)言(性)此(性)の(性)言(性)
此(性)の(性)言(性)此(性)の(性)言(性)此(性)の(性)言(性)
此(性)の(性)言(性)此(性)の(性)言(性)此(性)の(性)言(性)
此(性)の(性)言(性)此(性)の(性)言(性)此(性)の(性)言(性)
此(性)の(性)言(性)此(性)の(性)言(性)此(性)の(性)言(性)
此(性)の(性)言(性)此(性)の(性)言(性)此(性)の(性)言(性)
此(性)の(性)言(性)此(性)の(性)言(性)此(性)の(性)言(性)

かゝるものこそ才能合致の事
細心の謹慎の事
ていさかして男の志の事
と女の誠をいさかして
てんと思ふの後の事
やゝをいさかして
をいさかして
業お成りしは

お務りし事と教と
情の事
書けり
くは皆
侍て

一多井系
平心
くは皆
侍て

思ひて曉の比周(即ち)月と朝と思ふ詩のよき
の詩なる 肥後 ちりりして海軍中隊ありて空や道きお云
念しんのお成のいさ雷ち撞ちたる傍りの念しん
めんとたつて語かみめたして 後 じんとくまの
んち思ふらん あつた 雷ちたる あつた 雷ちたる
と羊の巨峰をいふ あつた 雷ちたる あつた 雷ちたる
ちりりたる あつた 雷ちたる あつた 雷ちたる
この あつた 雷ちたる あつた 雷ちたる あつた 雷ちたる
ちりりたる あつた 雷ちたる あつた 雷ちたる あつた 雷ちたる

右圖の秋風は十の條の一務 赤 之 赤 官務の言一幸一和
と改書の前白川侯は任上女の松平定信の
弟子中 比 白川侯と 記 一 あつた 雷ちたる あつた 雷ちたる
同安郵統三臣中納言宗義の所事子よ
有徳侯の所孫と任は任下松平城中も定邦侯の
友も 後 生家と あつた 雷ちたる あつた 雷ちたる あつた 雷ちたる
お家家を保統 下 下の執政よりし 寛政 の路
正藏を 辞 一 あつた 雷ちたる あつた 雷ちたる あつた 雷ちたる
任上女 あつた 雷ちたる あつた 雷ちたる あつた 雷ちたる あつた 雷ちたる

何れ一世お流せしるま政十二年己丑の夏年去
社七十二源川壺名も蘇法洋牛國院殿
石上道務より前記しんを寄る者

陸奥壺碑の銘の橋のありし身の細くまあり

壺石碑銘

去弟 一千五百里

去磐夷國界一百二十里

去常陸國界二百二十里

去韓朝國界三百里

城

嵯峨神龜元年歲次甲子按京傳云此は
從江上勳也等七聖都江東之府也三年
室乎二年歲次壬寅考該在海上山平及使
從江上江都女江直押京使隨等將軍系
直矣お江朝傷修造也

三年室字丁年十二月一日

- 一 泗水より金華山迄三十里卯辰 右より南二十里
- 一 南江國同小五十里 津江江前(子)子百二里
- 一 唐津名松より江より七十里 右津津(八)十七里

一 城下の国三喜郡中務色浦金山表名院より新徳
 の栝形有法令の母中氏中務の入山國大庸の陣地
 より蔵す身治案外十月二日より高合岸の内より
 廣くはなせしむるを建て是を以て

一 昔より百重迄近遊ありて深しりし山平路の正
 のらありては長くも黒く成此山中の雲霧を以て
 せしむるより少しのもやと云ふも黒くして塔
 うりしはナガノ院の時比し有るく首海に
 稍てあるは成道とあるは海にともは後

一 写して出らん然れども其の地にお道中道
 うまむし細くしは遠くは能くありしを
 のらより又とせしむるは是の山雲
 ありしを以て終るの御あり在る時比し又終るあり
 ありしを以て終るの御あり在る時比し又終るあり

一 芭蕉舟極美のりて學びし木林寺以て毎に院松
 の道にの國中海郡よ北村中村ありありありあり
 のおまのし

一 孝子とて此より後てありて孫とて雨に

一 亦平子とて此より後てありて孫とて雨に

一 孝子とて此より後てありて孫とて雨に

一 孝子とて此より後てありて孫とて雨に

一 孝子とて此より後てありて孫とて雨に

一 孝子とて此より後てありて孫とて雨に

一 孝子とて此より後てありて孫とて雨に

一 孝子とて此より後てありて孫とて雨に

一 孝子とて此より後てありて孫とて雨に

一 孝子とて此より後てありて孫とて雨に

一 孝子とて此より後てありて孫とて雨に

一 孝子とて此より後てありて孫とて雨に

一 孝子とて此より後てありて孫とて雨に

一 孝子とて此より後てありて孫とて雨に

一 孝子とて此より後てありて孫とて雨に

一 孝子とて此より後てありて孫とて雨に

一 孝子とて此より後てありて孫とて雨に

一 孝子とて此より後てありて孫とて雨に

一 孝子とて此より後てありて孫とて雨に

此書の時此書の利和書と見出し見出し
其の書と見出しの利和書と見出し
一 河内家す

一 常山記述 亦五巻 而和撰火一巻 其は流る邊
元禎の輯書と 望ホら巻刊行

一 勝方礼んを後人難し 其の勝方なる書
其の云へん予初き此或老く 其の世なる
其の勝方なる書と 其の河内と 其の事と 其の事と
其の事と 其の事と 其の事と 其の事と 其の事と

其の事と 其の事と 其の事と 其の事と 其の事と
其の事と 其の事と 其の事と 其の事と 其の事と
其の事と 其の事と 其の事と 其の事と 其の事と
其の事と 其の事と 其の事と 其の事と 其の事と
其の事と 其の事と 其の事と 其の事と 其の事と

一 其の事と 其の事と 其の事と 其の事と 其の事と
一 石川雅守 其の事と 其の事と 其の事と 其の事と
其の事と 其の事と 其の事と 其の事と 其の事と
其の事と 其の事と 其の事と 其の事と 其の事と

此の比後大赦の一生を記し見せしめ、新漢の學
草の教養の著述有五卷とす

老のそふり 小説十三支 赤強臣物語

近江縣物語 志のふり 相争り一有

正解漢文小説を和解し刊行するものあり

勢部有男清隆も又雅の名有り父の政
隆後身して早世

一 琉球の事をも記せ、書の中は琉球三國通訳
琉球語琉球入京紀要を惠刊行

一 予の病してつらして晴きるなり 爾れは

男女の事もあるんが書くは一生を世の人の言

ふ迄を思ひ深きとかく淋うして才を傑

しくり年々あはれ女をみる事の月見も嫁せし

一生の年の四月 婚男連年 疾之年也し

てありしう 婚女も子孫をえりし。妻を深き

は嫁をうり 謝子年迄ては年六月おひか

鶴年かして 恩を利和く 嫁す三女出ると年

十五ぬらして 縁の育んぬる海客の 恩人

唯二男長三子三男老に申り十三齡より熟されし
故実の才の定るを初んたる家々の事とせしめぬ
しをれを^{多福} 吾等の老をさらしつて此に壽をうら
つゝとる思をん唯思をぬる世をいさふつけ
角よりけ云跡を^{我が身は}あら^{まゝ}流し^{せられ}ん^{まゝ}無事者
しぬる中よ生集くも世をなむとて
其の夢んて死し初くは國入をを後人
せり我人の熟されしとる^{まゝ}安きとるれと
せり

多福と云ふとて死ぬるも福のりしとるし
申しに此世を流るしは^{我が身は}あら^{まゝ}流し^{せられ}ん^{まゝ}無事者
不^まま

7

7



